

十日田 良一 博士

「津輕十三湊の研究」

(東北大学文学部研究九年報第七号)

高橋 栄 悦

十三湊が歴史研究の対象として総合的に取上げられたことは今までになかったといつてよい。日本海歴史の樞軸である著者が、ここに交通史の立場から十三湊を取上げ、研究史上に一段階を劃せられたことは、後学の幸の士なる慶びとせねばならぬ處である。

十三湊に關しては、古くは吉田東伍博士の大日本地名辞書に見られるところの、名称からする研究があり、以後の研究も大方その線に沿つてなされてい

る。資料の乏しさからして、解決を与えられずにいるのが現状のようである。所で近世以前の史料に乏しいことは地方史の一般であろうが、十三に關しても、中史史に登揚したことが殆どないために所謂一軍史料は全く期待できない。そしてたゞ津輕一統志の附巻に載せられていた十三往來しが唯一の史料であつたが、近年、善田貞吉博士によつて秋田元子齋家から十三湊新伝記なる新史料が発見せられ、本論文において十三往來と共に併せ用いておられることは注目される處である。その史料批判はともかくと

曰「トサ」が「じゅうさん」に変化せるものとする
 立場をとつて好対照を呈している。善者はこれに因
 し、主として四の立場に立つて「アイヌ語か否かは
 別として「トサ」説をとられる。即ち承應二年（
 一六五三）から寛文元年（一六六一）の間に編纂さ
 れたと推定される海路誌「湊の巻」中に、恐らく十

三を指したであろうと思われる處に「戸佐」と書い
 てあることから、江戸時代の初めには「とさ」と呼
 ばれていたことを明らかにし、更にまた、明和七年
 （一七七〇）編纂の舊海日本汐路之記には十三に「
 とさ」と振仮名がつけられてゐることから、江戸時
 代の中頃にも「とさ」と呼ばれていたとして、「と
 さ」が本来の名称であり、それが「じゅうさん」に
 変化したとするのが自然であるとされる。その変化
 した動機については四と同じく、津輕藩主土佐守を
 忌んだためとし、たゞ土佐守が誹れであるかにつ
 ては三代信義、或いは八代信明であろうとされる。

— 十三湊の地勢 —

この段で善者は十三湊の地理的要素を叙述してお
 り、更にまた、十三湊は相内及び十三という二
 の地域的單位から成つており、前者には城廓（福島

城）及び武家屋敷があり、後者は所謂港町として商
 業上の中心となしてゐたとされる（新説記）。福島
 城に因しては前掲吉田博士の善書による十三湊の東
 岸中里町今泉に求める説を非とし、相内の地域に求
 められる。

— 十三湊の起源 —

湊の起源に因して善者は次のようにいわれる。即
 ち、「善田博士は、日本書紀齊明天皇四年四月の條
 に見える阿倍比羅夫が有向濱で渡鳥の糞を費應す
 る記事を挙げて、その有向濱というのは後の江流末
 郡にその名が傳わり、津輕郡中名字に、可江流末郡
 五百町、十三湊郡とも云ふがリ。』とあるによつて、
 有向濱とは十三湊のことであると見、比羅夫以前に
 於ても既に北海道航路の要津として相當の般販を示し
 ていたことが察せられると述べられておる（紋植紋
 彦彌城地味御前代外點）。この説は柳土史家の殆ど
 全部によつて採用せられており、中世の十三湊の繁
 盛から考之れば、たゞ推測ではあるが、一方に西
 津輕郡の深浦が有向濱であるとの説がある。これも
 亦深い根據のあるものでは無いが、日本書紀の記事
 をみれば、有向濱のことを書いたところには、今日

の秋田縣男鹿半島の辺のことまでしか士でない。
 それで私口この時に十三湊まで進んだと見るよりも、
 もつと南に一應根柢を置いて蝦夷を招撫したとする
 方がよいと思ふから、寧ろ深浦説に賛成したい、従
 つて阿倍比羅夫の遠征當時に十三湊が港灣として重
 要な地奥であつたかどうかが明かでない、有向濱の
 記事は十三湊を指すものでは無いと思ふ。

要するに番香は、書紀齊明紀中における有向濱が
 十三湊を指すとする豊田説に反対される立場に立ち
 結局、阿倍比羅夫時代、或いはそれ以前に湊の起源
 を求めることはできず、それ以後であると推察する
 にとどめ、確實には平安末期、平泉政権の盛時に本
 め得るとし、中世安東氏の墾跡によつて繁栄の基礎
 が確立されたこと（（豊田史記の補遺））
 註 齊明紀中の有向濱に關する有力な説として口、
 著者が指摘しておられるように十三湊及び深浦の
 二説があり、決定的な史料の無いままに論議の盡
 きぬ處であるが、番香が深浦説に賛成される場合、
 渡島を何処へ求むるかが判然としない。因みに渡
 島に關する諸説を見らば、渡島を東北地方、
 所謂越ノ國以北、直ノ奥とする説、或いはこれを

極限して津輕地方とする説、佐渡ノ島説、北海道
 渡島地方とする説等があり、このいづれをとるか
 或いは別説をとらるかによつて、有向濱そのも
 のの判断も異つてくるのではなからうか。同じ番
 香による日本海圍史概説に曰、「齊明天皇の時に
 阿倍比羅夫は水軍を率いて土羽、津輕の蝦夷を征
 服し、進んで北海道にまで行った。し（（要二章））
 とあるので、渡島を或いは北海道に比定されてお
 られるのではなからうかと思われぬか、もしそう
 だとするならば、比羅夫は「有向濱に於いて渡島
 の蝦夷軍を召し聚めて大饗」したのであるから、
 渡島は北海道から深浦に有向濱まで彼等を招致し
 たとするよりも、有向濱を今少し渡島の近くに求
 めてよいのではなからうか。また百八十艘の船団
 の安全を確保する港灣の存在、という点から見ても、
 書記の叙述のみを積極的な理由とされる著者
 の見解は論據が弱いように思われる。

また、上述の二説の他に有向濱を有向（（うとう））
 の濱とする説も郷土史家の向には行われてい
 るが、これ口有向の「向」を「向」の誤りであると
 する誤字説に基くものであつて、前掲板谷氏等し

この説をとられる。しかし誤字説は研究者の最も警戒せねばならぬ處であり、史料の解説は可能な限り原史料に忠実でなければならぬ。またこの説にいう有向の濱は現在の陸奥湾内、青森附近とされてゐるから、津代ツノはよりこの地に至る比羅夫の行動とあらずけてみる場合、地理的に困難さを感ぜずにはいられない。従つてこの説は特に向題とならぬのであらうが、かかる所説も存することを申し添えておく。

— 安東氏の築城 —

さて、安東氏の築城年代に關する確實な史料は何もない。この段で善香は元年発見された十三湊新築記の中に、

大日本國奥州十三湊新築者。花園帝御宇正和年中
安倍貞季公所築之邸廓也。

とあるにより「その正和年中」ということが正しいかどうかは向題があつても、鎌倉時代の末に安東氏が十三と根柢とすうようになったことを傳えたものとして信じてよいと思ふとされる。

所で十三の地畵に口現在、喜川及び福島の二城址の存在を見るか、善香はこの時築かれた新築が即ち

福島城下あるとし、更に、新築に對して所謂旧城の存在を考え、その上に規模雄大な新築が営まれたとされる。新旧両城存在の向題は湊の起源を大きく左右するものである。その當否は別として、ただここで考えられることは旧城はなくとも、新しく築城されたものは新築といひ得るということである。この点に關しては、今後の考古学的な研究成果によつても他ないのではなからうか。

— 十三往來と十三湊新築記 —

本論文の紹介に先立ち、十三湊に關する根本史料はこの二よりないことを指摘しておいたが、両者の成立年代について、一般には新築記は十三往來を模したものと信せられていた。ところが善香はこの段下新築記が十三往來に先行するもののものであるとし、「新しい城が出来たので、その城のこゝを城主の政治を讚美した文章が書かれ、それを参考として當時流行の往來物が作られたと見るべきである」とされる。新築記に關しては、前掲加藤氏のように「巧彫刻と三十五号、内脚」十三往來を模した偽書であるとすう説もあるが、両者は大同ではあつても小異があり、偽書と断定するにはよほど慎重でなければ

ならぬようである。

— 十三湊の繁栄 —

湊の繁栄については、郷土史家の多くが貞應の廻船式目の奥書と引用して、鎌倉時代に十三湊が七湊の一に数えられる程に繁栄したと説いているのに対し、著者は、先ず式目の「少なくともその奥書の「三津七湊」の記事の「貞應成立に既向をさし口さみ」三津の中に脚が挙げられていること、(三)「三津七湊」の記事のなほ廻船式目も多く残つて居り、この記事のある廻船式目で年代の判明せるものは天正九年(一五八一)であること、の二点を理由として、室町中葉以後の成立になるものとされる。従つて、「三津七湊」の記事に基いた所説は「架空の論である」といわねばならぬ」とされる。

所で起源の問題はさて置き、以後実際に繁栄したことに關して著者は「若狭國の羽賀寺縁起によれば、後花園天皇永享七年(一四三五)に同寺が火災に罹つたので、天皇は再興をはからしめ、奥州十三湊日之本將軍安倍成介康季に命じて造営させられ、永享八年(一四三六)より着手して文安四年(一四四七)に落成したとある」ことをとらえ「これによれば

永享の頃に十三に居た安車氏が羽賀寺を再建する程の實力があつて、それが京都にまで聞えていたことが知られるのであり、これは若狭の繁栄がなければ到底あり得ないことである。」とされる。このように繁栄がいかにしてなされたかに關しては、十三往來に

西澗海漫々。而夷船京船群集。並建宏調船。漢成市。

と記されているように、主として交易によつたものとされる。

さて安車氏の十三没落の年代については、下國系図、松前年代記事がすべて嘉吉三年(一四四三)としておるが、前掲如禰氏は満濟准后日記永享四年十月廿一日條に

今日於小松谷被仰條々事。一與ノ下國與南郎弓矢事ニ付テ。下國弓矢ニ取負。エソカ島へ没落云々。仍和陸事連々申向。先度被仰條々候處。南郎不承引申也。靈可被仰條々可為何様哉。各意見可申入旨島山・山名・赤松ニ可相尋云々。仍三人ニ相尋處。島山靈可申入云々。山名・赤松ハ靈可仰條々候宜存云々。

とあることから永享四年（一四三二）であることとされる（坊野の日記）。しかしこの條は必ずしも永享四年十月廿一日の出来事ではなく、事件そのものに可なり長い時間的幅をもつたものであろうことが知られる。著者はこの点を衝いて「それよりも恐らく以前のことであつて、幕府が和陸を勤めても幕府氏が承知せぬので、重ねて仰せ遣わすことになつた」という意味であると思う。そうすれば多分この幕府の幹旋と安東氏の實力恢復とにより、十三口再び安東氏の手に戻り、その勢で羽賀寺再建をもちやつたし、従つて、没落年代も「嘉吉三年よりせん前に前ではなからう」とされる。ただ、この点を下国系図及び松前年代記によつて、積極的に論証されることを望み得るので口は口からうか。

— 十三歳の衰微 —

安東氏が去つて後の十三は、城下町としての生命は終りを告げたが、新しい領主の下下港としての繁栄は持続された。津輕藩日記によれば元禄十年（一六九七）頃には港としてなお盛であつたらしいが、その頃、或いはそれ以前から漸次衰微に向いつつあつたものと思われろ。これについて著者は次の三点を

を原因とする。即ち

- (一) 明暦・徳治・寛文の三回の大火災に遭つたこと。
- (二) 土砂の堆積や水戸口の変化によつて港灣悪化したこと。

(三) 日本海の海運に於ける航路開港と積荷の変化。
 (一)、(二)は特に問題なく、(三)については昔々の積荷が主として海産物、木材であつたのに対し、江戸時代に入つてからは全国的に米が主となつたこと、また西廻航路（西廻海運）寛永年間に開始せられた。——同著者、日本海運史概説）が急速に開け、奥羽各地の産米も大阪で売却されるようになったこと等の歴史的背景を見るとき、著者は十三の位置が比に論じている事實を指摘して、「延宝六年（一六八七）の藩の日記に、初めて大阪に米を廻送することが見えるが、この頃から青森口東廻の積土港、鰯沢は西廻の積土港として、函濱と呼ばれるようになったため、主として木材の積土港であつた十三の、港灣としての重要性はこの後次第に失われ、衰の衰微せる最大の原因をここにありとされる。
 註 細かい点ではあるが、著者は延宝六年の日記をもつて大阪に米を廻送した初見とされるが、次

のような史料もあるので参考に供したい。

津輕藩日記延宝三乙卯年

八月十四庚午日 庵

一 於敦賀田文左衛門成田七郎右衛門ヨ里六日五日之書状今日到着 御取米船六月三日迄不発 廿一艘無恙着岸之由米相場銀十匁付一斗五六升之由申來

これによつても知られる通り、津輕から西廻で産米が輸送された初見は、それが敦賀までであったとはいへ更に幾年か幽ろことができるようである。ともあれ、妻の生命がこの時期を一転期として大きく変貌を遂げたであろうことは推測に難くない。延宝三年の日記は、著香の論述を更に確実なものとなし解るであろうと思う。

著香はその名跡に筆を起し、妻の起源、発展から衰微に至る歴史の流氷を、年代的には一應と代から近世に至る時間的推移を、史料の僅少にも拘らず、その適確な判断を以つて叙述され来たのであるが、紹介者はここに著香の意をばたしてどの程度まで正確に傳へ得たであろうか。摘要にあたりそれを疑わ

すにけいられぬ。ただ、誤れるは此正を、過ぎたるは寛恕を請うのみである。